

平成22年度 国際交流推進機構基盤強化経費に
基づく教職員等の海外派遣事業実施報告書

所属 附属図書館 情報管理課電子情報掛
職名 専門職員
氏名 西村 暁子

所属 附属図書館 情報サービス課資料運用掛
職名 一般職員
氏名 大前 梓

日 程	研修先
平成23年（2011年）	
（１）2月27日	出発／現地到着
（２）2月28日	トロント大学
（３）3月 1日	クイーンズ大学
（４）3月 2日	カナダ国立図書館・文書館
（５）3月 3日	CANADIANA（西村） オタワ大学（大前）
（６）3月 4日	マギル大学
（７）3月 5日	現地出発
（８）3月 6日	帰国

調査・研修の概要

（調査の目的）

カナダの大規模大学とカナダ国立図書館・文書館における以下の項目について調査し、
本学図書館の施策に反映させる。

- ・所蔵資料の電子化
- ・e-Book Readerの提供
- ・図書館の開館時間延長を中心とした利用者サービス
- ・図書館のゾーニングと館内施設・設備の提供

(訪問先、調査項目、対応者名)

トロント大学 John P. Robarts Research Library (コーディネーター: Margaret Wall)

- ・概要 Julie Hannaford (Associate Librarian)
- ・館内ツアー Margaret Wall (Communications Librarian)
- ・資料の電子化 Gabe Juszel (Scanning Coordinator, Internet Archive)
- ・e-resourceについて
Peter Clinton (Director, Information Technology Services)
- ・ゾーニングと開館時間延長について
Alfred Cheng (Chief Administrative Officer, Finance & Admin)
Lari Langford (Head of Access & Information Department)

クイーンズ大学 Stauffer Library (コーディネーター: Michael Vandenburg)

- ・館内ツアー Nathalie Soini (Learning Commons Coordinator)
Michael Vandenburg (Division Head of Discovery Systems)
- ・蔵書構築とe-resourceについて
Jane Philipps (Collection Development Coordinator)
Wayne Jones (Division Head of Collection Development & Electronic Resource Management)
Sharon Musgrave (Division Head of Collections Management and Services)
- ・利用者サービス、開館時間延長サービス
Sharon Murphy (Division Head of Academic Services)
- ・図書館システム、Webサービス
Michael Vandenburg (Division Head of Discovery Systems)
- ・特殊コレクションと電子化
Barbara Teatero (Associate University Librarian)

カナダ国立図書館・文書館 (コーディネーター: Suzanne Pagé-Dazé)

- ・利用者サービス、館内ツアー
Marie-Josée Tolszczuk (Manager, Reference Services)
- ・資料の電子化 Carrie Alexander (Acting Manager)

・資料保存 Suzanne Pagé-Dazé (Tours and Visits Coordinator) CANADIANA (コーディネート : Ronald Walker) ・資料の電子化 Ronald Walker (Executive Director) - Judi McNeil (Production Coordinator) - William Wueppelmann (Manager, Information Systems) オタワ大学 Morisset Library (コーディネート : Maryse Laflamme) ・利用者サービス、開館時間延長 - Hélène Carrier (Director) - Maryse Laflamme, (Head, Reference Service) ・館内ツアー Paul-Cezar Tanase (Information Literacy Library Specialist) ・資料保存 Lucie Desjardins (Archivist, Archives and Special Collections) マギル大学 Humanities & Social Sciences Library (コーディネート : Bruna Ceccolini) ・図書館のデザインと利用者サービス - Diane Koen (Associate Director, Planning and Resources) ・資料の電子化 Louise O'Neill (Associate Director, Library Technology Services) - Amy Buckland (eScholarship, ePublishing & Digitization Coordinator) ・館内ツアー Amy Buckland
調査・研修の成果
[各訪問先の概要] トロント大学 カナダ国内で最も人口の多い大都市、トロントに位置する。1827年創立で、カナダ最大の大学である。学生数は学部生が約55,000人、院生が約14,000人である。今回訪問した John P. Robarts Research Libraryは三角柱というユニークな形をした建物である。 クイーンズ大学 オンタリオ州キングストンに位置する。1841年創立である。学生数は学部生が約14,500人、院生が約3,500人である。学内に6つの図書館がある。中心となっているのは今回訪問したStauffer Humanities and Social Sciences Libraryである。 カナダ国立図書館・文書館 元々は図書館と文書館とで別々に存在していたが、2004年に合併した。メインのサービス拠点がオンタリオ州オタワにある Library and Archives Canada であり、そこから車で

20 分ほど行ったところにある Preservation Centre（ケベック州ガティノー）で資料の電子化・修復・保存を行っている。他に、バンクーバー・エドモントン・ウィニペグ・ハリファックスにサービス拠点がある。

CANADIANA

CANADIANAは、カナダに関する文書（本、雑誌、ポスター、パンフレット等）を電子化する非営利団体である。「カナダに関する文書」とは、カナダについて書かれた本・カナダで出版された本・カナダ人が書いた本などである。

団体の歴史は1978年に前身である Canadian Institute for Historical Microreproductions (CIHM) が創設されたところから始まる。当初は「カナダに関する文書をマイクロフィルム（フィッシュ）化し、保存・供給する団体」として発足した。2000年にマイクロフィルム（フィッシュ）化を中止し、ECO (Early Canadiana Online) の有料提供と一部オープンアクセスを開始した。2006年に CARL (The Canadian Association of Research Libraries) の中に「AlouetteCanada」が発足。2008年に CIHM と AlouetteCanada が合併して CANADIANA が発足した。

資金は政府からの補助と、ECO の購読料などからまかなわれている。

Board of Directors は permanent member が Bibliothèque et Archives nationales du Québec、CARL、カナダ国立図書館・文書館であり、他のメンバーは年 1 回の定例会議で選挙で決定される。今回訪問する中ではトロント大学とオタワ大学が入っている。

ホームページ上では住所が「440 Laurier Avenue West」となっていたが、今回訪問した場所はカナダ国立図書館・文書館の4階にある CANADIANA のオフィス（395 Wellington Street）であった。

オタワ大学

首都オタワに位置する。1848年創立で、学生数は学部生約33,400人、院生約5,600人である。英語とフランス語のいずれでも学習・研究のできる二ヶ国語大学である。今回訪問したMorisset Libraryは中央館的な役割を果たす図書館であり、独自に図書館を持っている Law、Health Science、Management以外の分野について主に担当している。また、同じ建物内にはMusic Libraryも設置されている。

マギル大学

モントリオールに位置する。学部生約25,200人と院生約8,300人が所属する中規模大学である。英語を主とする大学ではあるが、地域としてはフランス語の使用率が高いため、図書館内の案内板や掲示物には英仏併記が多く見られた。メインキャンパスのほかに別キャンパスがひとつあり、9の建物に13の図書館が設置されている。今回訪問したHumanities & Social Sciences Libraryは規模・利用ともにその中でも最大で、McLennan Library Building

とRedpath Library Buildingの2つの建物を渡り廊下でつないだ構造になっていた。

[資料の電子化]

今回訪問して感じたのは、「カナダでは特に国として誰かがイニシアティブを取って電子化を進めているわけではなく、カナダ国立図書館・文書館、トロント大学をはじめとする一部の大学図書館、他の大学図書館、CANADIANA、の四者が四様に電子化を行っている」ということであった。

まず、トロント大学である。Internet Archiveという非営利団体と協同して、自館および他の大学図書館が所蔵する、著作権が切れた書籍の電子化を行っている。Internet ArchiveがRoberts Libraryの一角に拠点を構え、Internet Archiveのロゴが入った暗幕をかけた十数台の上向きスキャナを設置して、8:30から16:00、16:00から23:30の二交代制で電子化を行っている。一人コーディネーターがいて、その本が電子化に向いているかどうか（製本の状態がきつくてあまり大きく開かない、保存状態がよくないなど）をチェックしている。電子化に向かない場合、同じ本を他大学の図書館から借りる。撮影された画像はその都度1点ずつチェックされ、修正される。作業が済んだ画像はサンフランシスコにあるサーバーに送られ、JPEG2000に加工されて、PDF化・OCRをかける等の加工を経て、Internet Archiveのホームページ上で公開される。

次に、カナダ国立図書館・文書館である。サービス拠点はオタワにある建物であるが、電子化を行っているのは車で20分ほど行ったところにあるPreservation Centre（ケベック州ガティノー）である。建物が圧巻で、コンクリートの建物を中央に置き、ガラスで大きく覆った、近未来的な工場のような外見である。二重構造にすることにより、外部からの影響（温度など）を防いでいるそうである。ここで、自館が所蔵する資料の電子化を行っている。

電子化はコンクリートの建物の上にある階で行っている。壁が可動式で、自由にレイアウトを変更できるようになっている。細かく間仕切りされたところにさまざまな形状のスキャナが置いてあり、電子化が行われていた。自動でページ送りを行う冊子用上向きスキャナ「Kirtas」、地図などの大判のものがスキャンできる52インチ（1.3208m）のスキャナ、A3判のフラットヘッドスキャナ、自動紙送り装置つきスキャナ、マイクロフィルムを電子化するスキャナなど、さまざまなタイプのスキャナが置いてあった。機械にかけても破損しないような資料は自動化されたスキャナ（自動でページ送りをしたり、紙送り装置がついていたりする）で、痛みの激しい資料は手作業でスキャンを行っているとのことであった。作業中のファイルの管理は表計算ソフトウェアで行っていた。画像はTiff形式で作成していた。電子化した資料については、現物の利用は断っているとのことであった。動画についても、電子化の設備が備わっていた。

Webページが大変ユニークである。見せ方が工夫されており、「Virtual Exhibitions」コーナーでは「Canada's UFOs: The Search for the Unknown」（UFOに関する行政文書を掲

載している)や「Life of a Rock Star」(あたかも音楽のロック・スターを紹介するような見せ方で、初めてカナダの鉱物資源について調査した調査団の記録を紹介している)など、思わずクリックしたくなるようなコンテンツが多数含まれている。また、今回は見学できなかったが、勲章などを3Dイメージで見せるコンテンツの公開も始めた。

三番目はCANADIANAである。前身のCIHMから数えると、33年の歴史を持つ。上記四者の中では最も古いプロジェクトである。オタワ内の2か所にオフィスを構えている。カナダ国立図書館・文書館の中には前身のCIHMの時からオフィスを持っているとのことである。以前は資料のマイクロフィルム化を行っていたが、現在はマイクロフィルム(フィッシュも)からの電子化と、カナダ国立図書館・文書館にある資料の電子化を行っている。この機関の最大の特徴は、電子化の対象とする資料が、上記2館が自館資料であるのに対し、「カナダに関する資料・カナダで出版された資料・カナダ人が書いた資料」を電子化の対象としていることである。それらをECO (Early Canadiana Online) として有料公開し、一部を無料公開している。

電子化については、マイクロフィルムの電子化はアウトソーシングで、マイクロフィッシュと現物からの電子化はCANADIANA内で、15-6人で行っている。電子化の進捗状況は、正確なところはわからないがおそらく数%程度であろう、これは100年以上かかる事業になるだろう、とのことであった。現在は電子化の資金を得るためにECOの購読を有料にしているが、将来的には無料にしたいそうである。webサーバーはクラウドコンピューティングを利用し、コピーを別の場所に置いている。また、将来的には、カナダ人が持っている写真を各自で電子化してアップロードできる仕組みを作りたい、とのことであった。

トロント大学で大規模な資料の電子化が行われていることについて、同じ資料が重複して電子化されることもあるのではないかと質問したところ、それも起こりうるだろうが、同じ本のコピーが複数箇所にあるというのは、ファイルの保存の面でいいことである、という回答が返ってきた。また、なぜカナダはこれほどまでに資料の電子化に熱心なのかたずねたところ、「カナダ国民に、平等に資料に接する機会を保障するためである。カナダは国土が広いので、実際に紙の資料に接するのはむずかしいが、電子化してwebで公開すれば、誰でも見ることができる。」とのことであった。

また、電子化に熱心なことの背景として、genealogyへの関心の深さが考えられる。Genealogyとは「英辞郎V」(アルク)によると「【名】家系、血統、血筋、系統、系譜、系図学」という意味である。カナダ国立図書館・文書館にはCanadian Genealogy Centreがあり、自分の家系をたどろうとする人達に情報を提供している。電子化が進んでさまざまな資料をweb上で閲覧することができるになれば、自宅にいながらにして家系をさかのぼることができるであろう。

そして、上記の三者とは別に独自で自館の貴重資料の電子化を行っているのが、マギル大学である。カナダ国立図書館・文書館にもあったスキャナ「Kirtas」や、読み込んだデータをもとに即座に印刷・簡易製本する「エスプレッソ・ブック・マシン」、上向きスキャ

ナ等、様々なスキャナがあった。利用者の要望に応じて、電子化してデータを提供したり、エスプレッソ・ブック・マシンで印刷・製本したものを提供したりしている。

なお、今回訪問したいずれの機関も資料の保存にマイクロフィルムは使用していない。

[e-Book Readerの提供]

日本では、2010年は「電子書籍元年」と称され、各社からさまざまな電子書籍端末が発売された。販売される書籍のファイルの形式は各社さまざまに互換性がなく、また、どの製品が今後ロングセラーとして生き残るのか等、不明なところが多い。図書館としていかにこれら資料を収集し、利用者に提供すべきか、判断に悩むところである。そこで、Kindle等e-Book Readerが日本よりも普及している英語圏のカナダにおいて、大学図書館はこれらの資料にどのように対応しているかを調査し、本学図書館の参考にすることを考えた。

調査した結果、今回訪問した中でe-Book Readerを利用者に提供しているのはマギル大学のみであった。マギル大学は「Sony Reader Touch Edition PRS-600」を学内8か所の図書館で貸出していた。借りることができるのはマギル大学の学生・教職員に限られ、2週間借りることができる。延滞した場合や本体・付属品を紛失した場合等、細かく罰金が設定されていた。Readerには書籍が前もってダウンロードしてあるが、利用者が自分の読みたい書籍を図書館から借りることもできる。Readerの貸出状況は図書館により異なり、中央の図書館では大変人気があり常に貸出状態だが、図書館によってはあまり貸出のない館もあり、貸出状況に応じて各館で所有する台数を変更する相談をしているところであった。特に経済学部学生に人気があるとのことであった。また、iPadを貸し出すことも検討しているとのことであった。

トロント大学とクイーンズ大学では、特にe-Book Readerの利用者への貸出は考えていないとのことであった。ただし、KindleやiPad等は所有し、研究しているとのことであるが、アカウントの管理がむずかしいことや、Readerにこだわるよりも、図書館としていかに多数の資料を利用者に提供することができるか、コンテンツの提供に力を注いだほうがいい、という意見であった。

[開館時間の延長について]

今回訪問した各大学では、学期中、または試験期間中について図書館の24時間開館を行っている。いずれの図書館も学生自治組織からの強い要望と交渉を受けて、トライアルを実施後に本格運用を開始したとのことである。

昼間の開館中は入館時のIDチェックは行わず、外部の一般利用者が自由に入館できる環境になっているが、延長時間中は入り口で警備員によるIDチェックがあり、大学内部の人間しか利用できないようになっている。

夜間は基本的にスタッフの配置がない、または少ないためサービスは非常に制限されている。カウンターサービスは行わず、図書の貸出をする場合は自動貸出装置を使用し、返

却は自動返却装置または館内に設置されているブックポストを利用する。一方で、パソコンおよびプリンターの使用は夜間も可能である。

図書の貸出について、実施している大学としていない大学とがあったが、その理由の一つが建物自体の構造である。例えば、トロント大学Robarts Libraryのフロア分けは以下のようになっている。

1 階：P Cスペース

2 階：閲覧室、カフェテリア、事務室

3 階：A V資料室、閲覧室

4 階：参考図書、逐次刊行物（最近のもの）、政府出版物

5 階：地図・統計資料

6 階-8 階：事務スペース、及び特殊コレクション

9 階-13 階：書庫

14 階：事務スペース

このうち、夜間開館時に開放しているのは資料が配置されていない1 階から3 階のみである（A V資料室は施錠される）。それ以上の階に行くためのエスカレーター前には警備員がおり、一般の利用者が通れないようになっている。

また、マギル大学も夜間開館時には資料の配置がない別館をメインとして開放している。

逆に、全館開放している例としてクイーンズ大学が挙げられる。クイーンズ大学では全フロアに資料が配置されており、特殊な資料をのぞいて閲覧席と物理的な区切りがされていない。また、上階へのアクセスもエレベーターを含め数箇所あり、出入りを制限するのが難しい状態である。実際に、24時間開館を実施するにあたってはセキュリティに並んで資料の紛失が大きな懸念であったそうである。しかし、今のところは大量の紛失は発生していないとのことである。同じく全館開放をしているオタワ大学では、管理が大変であること、夜間の利用者は資料の貸出より学習スペースを求めていることを理由として、次の夜間開館からはP Cスペースと閲覧席がある1 階のみの開放とする予定である。

トロント大学では、人の出入りが特に多いのは午後11時から午前3時の間と午前7時30分から午前8時30分の間であるとのことだった。P Cコーナーが開放されていることから授業前の利用も多いのだろう、と推測されている。

実施に当たっては予算が大きな問題ではないかと質問をすると、どの図書館でも予算確保は行ったがコスト的にはそれほど大きくないとの回答であった。配置するスタッフの数が少ないため人件費があまり大きくなり、開放区域も限られており、さらに書架にはセンサーつきの電灯を使用しているから光熱費も節約できているとのことである。加えて、もともと通常の開館時間が午前8時30分ごろから深夜の午前2時ごろまでと、附属図書館と比べても圧倒的に長いため、延長される時間が約6時間程度と短いことも理由ではないかと考えられる。

なお、先に述べた資料の紛失も含め、いずれの図書館でも今のところ深刻なトラブルは

ないとのことである。

[館内施設・設備について]

館内を見学して、閲覧用の座席が非常に多いと感じた。大きな机やタイプの違う個人席など種類も様々であり、各席には必ず電源コンセントが設置されている。また、グループ学習室も多数設置されており、「場の提供」に重きを置いている様子が伺えた。

これら学習スペースの拡張のために、所蔵資料を減らすという思い切った手段も採られている。オタワ大学では職員が選んだ資料を外部書庫に移し、その分を学習スペースにあてたという。当初は反対も多かったが、現在のところ移送した資料の利用率は非常に低いとのことである。なお、これらの資料は出納式で、依頼から概ね24時間以内には図書館に到着し、利用者に渡すことができるようになっている。

なお館内のスペースをいわゆる「ラーニング・コモンズ」と名づけているのはクイーンズ大学のみであった。クイーンズ大学では1階を「Queen's Learning Commons」として、図書館とは別に運営されているIT Services (PC環境などの提供)、Adaptive Technology Centre (障害学生のための施設・機器提供を含む支援)、Learning Strategies Development (セミナー・ワークショップの開催や相談窓口などの学習支援)、Writing Centre (レポートの添削・書き方指導)といった各組織と協力して、事務所を設置したり学生サポートを雇用したりして総合的なサービスを行っている。図書館内でサービスを展開することによって、学生間での認知も高まり、利用者も増えたとのことであった。

[ゾーニングおよび飲食・ノイズポリシー]

・飲食物

どの大学でも概ね飲料についてはフタ付きの容器に入っているもの（フタ付き紙容器入りコーヒーも含む）であれば認められており、一部特殊資料の閲覧席では制限するという例外があった。一方、食品については館内設置のカフェテリア内のみ、冷たいもの（スナック、サンドイッチなど）のみ、全面不可と対応はまちまちであった。

図書館内に一般のコーヒーチェーン店を設置しているオタワ大学では温かい食べ物（ピザ、パスタなどにおいを発するもの）を不可としているため、店での販売物も飲料とお菓子やマフィン、サンドイッチなどルールの範囲内のものばかりになっている。しかし、そもそも店舗が存在するためにその周辺が混雑し、また話し声がうるさいなどの苦情が出るといった問題も起こっているとのことであった。

・ノイズ

フロアごとにノイズレベルを設定し一部で談話を認めている場合と、基本的には館内では静粛にするよう求めている場合との2つのケースがあった。ただし、先述のとおり訪問した各図書館ではグループ学習室が館内に多数設置されている。そのため、館内での談話を認めていない大学では、ディスカッションを必要とする場合はこれらの学習室の使用を

案内しているとのことであった。館内を見学した限りではこのルールは守られているように感じたが、もっとも苦情が多い分野でもあると教えてくれた図書館もあった。

- ・サイン

フロアやゾーンごとに飲食や談話の許可レベルを設定している図書館では、それを分かりやすく表示するための色分けされたマップやピクトグラムが掲示されていた。特にカナダは公用語が英語とフランス語の2種類ある上に留学生も多いため、文字で表記するよりもピクトグラムのほうが分かりやすいとのことであった。

[その他]

- ・ Summon

SummonとはSerials Solutions社が提供する、OPAC・データベース・電子ジャーナル等を一括して検索できるシステムである。ここ数年図書館界で注目されており、導入する図書館が増えている。今回訪問した中ではクイーンズ大学が導入しているが、トロント大学ももうすぐ導入するとのことであった。したがって、利用者による製品の評価についてはクイーンズ大学でだけ聞くことができたが、おおむね好評であるとのことであった。

本調査・研修により得られた成果を、本学の施策あるいは業務のためにどのように活用するか。（具体的に記述）

[資料の電子化]

カナダは国立図書館・文書館、大学図書館、CANADIANAの三者がバラバラとはいえども、積極的に資料の電子化を行っている。資料の電子化には、

- ・ 利用者に資料へのアクセスを保障する
- ・ 資料を保存する

という2つの意味がある。本学も貴重な資料を多数所有しており、まだまだ電子化は進んでいない。ぜひ資料の電子化を推進し、資料の利用の推進と保存に役立てるべきである。

ただし今回の研修で見た電子化機器類のうち、自動でページめくりをするタイプのものは、洋装本向けであり、本学の資料には向いていない。本学の資料は和装本で取扱いを慎重にすべきものばかりであるため、電子化も上向きタイプのスキャナで手作業で行うべきであり、時間も費用もかかる。

日本では資料の電子化に際し棲み分けができており、明治期以降の図書は国立国会図書館が電子化し、各大学・研究機関が所蔵する貴重資料は各大学・研究機関が電子化している。本学は本学で、責任を持って自館の貴重資料や紀要類を電子化すべきである。なお、資料は劣化が進むことがあり、また、いつ何時自然災害等で失われるかもわからない。できる限り電子化のスピードアップを図り、また、作成したファイルのコピーは地理的に離れた複数箇所（できれば海外にも）に保存すべきである。

[e-Book Readerの提供]

たまたま今回訪問した図書館があまりe-Book Readerの貸出に積極的でないところが多かったせいか、あまり性急にe-Book Readerの貸出を実施することはないのではないか、と思えた。日本の場合、各社各様の端末が発売されたばかりであることもあり、しばらく様子を見て、業界の状況が見えてきたところで貸出を始めても、決して遅くはないのではないだろうか。国内でどれだけ普及が進むか、どの会社の端末が一番普及するか、など、じっくり観察する必要がある。また、トロント大学の「Readerにこだわるよりも、図書館としていかに多数の資料を利用者に提供することができるか、コンテンツの提供に力を注いだほうがいい」という意見は説得力があった。

ただし、マギル大学ではe-Book Readerは大変人気があり、よく借りられている状態である。本学の学生にどれほどのニーズがあるかは調査できていないが、もしかすると貸し出すことにより、隠れていたニーズを掘り起こすことになる可能性がある。

[開館時間延長サービスについて]

今回訪問した各図書館では、いずれも学期中または試験期間中の24時間開館を実現していた。インタビューを行いながら以下のような要素が実現に影響したと感じた。

- ・学生の団体からの強い働きかけがあったこと
- ・図書館が学生のニーズを把握し「場の提供」に重点をおいていること
- ・通常の開館時間が長く、24時間開放のために延長となる時間が比較的短かったこと
- ・開放エリアを区切ることができる建物構造だったこと
- ・キャンパス内での夜間セキュリティサービス（警備員巡回および通報装置）が充実していること
- ・学生の大半がキャンパス内の寮に入居していること

建物構造やキャンパス内セキュリティなど、もともとの条件は当然ながら京都大学や附属図書館と大きく異なっている。そのため、単純にこれらを比較して考えるのは難しい。ただし、学生の行動には共通している点も多くあると考えられる。例えば、附属図書館の学習室24も、図書館閉館前の午後9時ごろから午前1時ごろまではほぼ満席となり、それ以降は在室者がぐっと減る。そして午前9時の閉室前の時間帯になると、登校してきた学生たちでまた利用が増える傾向にある（2010年12月下旬に観察）。これは訪問先の図書館で聞き取った利用人数の傾向と一致する。つまり、24時間通しての開館をせずとも、前後に時間を延長すればある程度の学生のニーズにこたえられる可能性があると考えられる。

また、いずれの図書館も試験中は学習の場の確保に力を注いでいる一方、休暇中には開館時間の延長サービスは行っていなかった。附属図書館も同様に2010年度には試験期間に限って土・日曜日の開館時間を延長している。これらのことを考えると、需要の高い時間帯・時期を検討し、そこからまずサービスを拡げていくことが、限りある予算を有効に使い、かつ学生のニーズを満たす上で非常に重要であるという。

さらに、今回の訪問では学生の学習・研究にはスペースの提供と同時に PC が欠かせないものであり、夜間の開館延長の時間帯でも高い需要があることを実感した。これについては次項で述べる。

[館内施設・設備について]

図書館の学習スペースの確保のためには増築または書架を減らすというのが考えられる方法である。しかし附属図書館は既に 2008 年の改修で書架の整理と事務スペース削減による閲覧スペースの拡充を行ったばかりであり、これ以上のスペース拡充は物理的に非常に困難であると考えられる。他には遠隔書庫を設置し資料を移動させるという方法が考えられる。しかし、50 万冊収蔵可能な書庫を学外に設置したオタワ大学での事例から、資料の選定には図書館員の慎重な判断とそのための十分な時間とが必要であること、また請求された資料をすぐに利用者に提供するためのシステム作りが重要だと再確認させられた。

また、単にスペースの広さだけでなく、現在の学生の多様な学習形態に対応していることも重要である。つまり、1 人で集中して学習できる個人キャレルがある一方でグループディスカッションのできる場所があり、本を広げることのできる閲覧机がある一方で十分な PC 席と関連機器とがあり、また持ち込みのモバイル用に電源と無線 LAN 環境が整備されている必要がある。特に、先に述べたとおり PC 環境については図書館の提供する e-resource が増えていること、レポート執筆にあたっても資料収集から本文作成まで PC 上で行う必要があることなどから、学生の需要が高いことは間違いない。現在学習室 24 では無線 LAN 環境以外に PC 関連機器の提供は一切していない。モバイルパソコンを持参している学生も多いが、プリントアウトは一切できない状況である。また、附属図書館内でも基本的には建物北側でしか無線 LAN が使用できない上、3 階情報端末エリアのプリンターは土・日曜日と祝日には稼働していない。しかし、授業資料の出力や、提出レポートのプリントアウトなど、プリンターの使用に関する利用者からの要望は根強い。ただ、現状として附属図書館の情報端末エリアはあくまでメディアセンターのサテライトであり、単独で PC 環境を提供しているわけではない。そのため、TA の配置がない分管理が難しいという側面がある。できることならば、図書館として利用者スペースを確保・整備するだけでなく、全学の図書館・室とメディアセンターとの協力体制をより強化し、無線 LAN を広く整備する、他の O S L との兼ね合いを考えながら土・日・祝日もプリンターなどの機器が利用できる場所を最低 1 箇所は確保するなど、利用者の利便を図るための工夫を考えていきたい。

[ゾーニングと飲食・ノイズポリシーについて]

ノイズレベルのゾーニングに関しては、静寂を好む利用者也ディスカッションを必要とする利用者もいずれも存在することから、物理的に明確にそれらを区切ることが一番重要だと感じた。見学して非常に明快であったのはオタワ大学で、ディスカッション可能なフロアから禁止のフロアへと 1 階分移動しただけで耳に入る音の大きさが全然違っていったの

が印象的だった。逆に、図書館中央に吹き抜けのあるクイーンズ大学ではどうしても声が他フロアにまで響いてしまうという問題があり、建物の構造をふまえたうえでの区画分けが必要であると感じた。

また図書館内の飲食については、どの図書館でもある程度実情に沿ってポリシーを決めて運用しているようであった。おおむねフタつきの飲料は認められており、閲覧席を見渡しても多くの生徒がボトル飲料やフタ付き紙コップ入りのコーヒーを持ち込んでいた。一方で、食品については持込みを認めていない、または制限している2種類のケースがあった。部分的に認められている図書館では多くの利用者が机上にスナックなどを広げていたほか、認めていない図書館であっても食べ物を持ち込んでいるケースがあり、ツアー中にスタッフが注意している光景も見られた。

ルールを作ってもそれを浸透させることの難しさを改めて感じる反面、学生が長時間図書館内で学習をしていること、ペットボトルや水筒が普及していることを考えて、利用者の声も取り入れた飲食ポリシーの見直しをしてみることも必要ではないかと感じた。いずれの場合もルールの設定やゾーン分けはわかりやすいものである必要がある。またサインや掲示物、web上での案内など、それらを利用者に知らせるための工夫をし、また運用開始後も職員の気がつく範囲であっても声掛けをするという取り組みが必要である。